

アメリカにおける日本語教育と その問題点について

武 本 昌 三

は じ め に

- I 日本語クラスの構成と orientation
- II FALL TERM (第1週)
- III FALL TERM (第2週)
- IV FALL TERM (第4週以降)
- V SPRING TERM (6ヶ月～9ヶ月)
- VI 日本語教育の若干の問題点

お わ り に

は じ め に

日本で学生達に英語を教えているわれわれ英語教師にとって、日本語と英語との間のへだたりは、しばしば、ため息が出るほどに大きい。欧米の外国語教育というのは、その対象が、普通、同じ印欧系の言語であることが多いから、そのような外国語教育に比べれば、言語体系の全く異なる日本語を母国語とするわれわれの英語教育は、少なからぬ handicap を負っていることになる。そして、この handicap をいかにして克服するかという問題意識が、日本における英語教育研究を興隆させてきた一因でもあった。明治以来の、強い欧米志向型の国民性にも支えられて、いまや日本は、英語教育研究の分野でも、世界の先進国であるといつてよい。¹⁾ *Teaching English as a Foreign Language* といったタイトルの本が、日本ほど多く読まれる国も、ちょっと他に類がないであろう。²⁾

それはそれで結構なことではあるが、しかし、われわれの英語教育と裏腹の関係にある欧米の外国語としての日本語教育が、日本の英語教育界でいままで

あまり参考にされてこなかったのは、不思議といえば不思議である。英語の学習を通じて、われわれは日本語そのものの理解も深めることが出来るように、英語を母国語とする学習者に対する日本語教育のあり方は、言語体系の相違からくる handicap の少なからぬ部分を共有しているという点でも、われわれの英語教育に多くの示唆を与えてくれるに違いない。そう考えて私は、1974年から1975年にかけて訪れたアメリカの Univ. of Oregon で、日本語クラスの聴講をはじめたのであった。

本稿では、日本語教授法にまで言及する紙数の余裕はないので、手始めとして、アメリカ人学生がはじめて日本語を習う First Year Japanese のクラスの概略を時間的経過にしたがって示すことに主眼をおき、授業の進め方や学習到達度などを、実際に用いられた教材や試験問題等によりたどっていく。そしてその中で、われわれの英語教育にも共通する日本語教育のいくつかの問題点を取上げ検討を加えていくことにしたい。

I. 日本語クラスの構成と orientation

Univ. of Oregon の日本語学科は College of Liberal Arts の Department of Chinese and Japanese に属していて、catalog には次のように紹介されている。

- (1) ただし、英語教育実施面での制度や教授法については昔から批判が絶えない。英語教育のながい、幅ひろい研究が教育改善につながらないのが、日本の特異な現象である。次のような批判に対しても現在ですら改善のきざしは一向に見えない。「私は、日本のように、外国語（特に英語）に対して特殊の必要性を感じているのであったら、それに相応した手を打つべきだと思う。ところが、実際行なわれていることは、50名以上を1クラスとし、2時間ぶっ通しで、週2回やるという、外国語教育の原則を無視した、世界に類例のない離れ業である。（中略）現実には、適当に遅れて授業が始められ、適当に早く切り上げられるので、100分の授業は正味70～80分となる。これで外国語の効果が挙げたとしたら、それは驚天動地的現象として、世界の外国語教授担当者を瞠目せしめるであろう。」大塚高信「新制大学の英語」『現代英語教育講座第1巻』研究社、昭和39年、pp. 55-6.
- (2) 主として英米人の専門家によって書かれたこの種の本が盲目的に受け容れられている傾向があるが、日本語を母国語とする学習者を想定して書かれたものは極めて数が少ない。日本語から英語へ導入していく日本の英語教育の立場は、特殊であることにもっと注目されなければならないであろう。

The aim of the program in Chinese and Japanese is to enable a student to achieve proficiency in reading, writing, and speaking the language and to acquire a fundamental knowledge of the literature of the country.

Students considering a major in Chinese or Japanese are advised to decide upon their major at the earliest possible stage of their university career, so that they are able to satisfy the requirements in the usual four years of undergraduate study.

ここにいう B. A. のための requirements は、一年目日本語15単位（秋、冬、春各学期5単位ずつ）、及び二年目日本語15単位、合計30の基礎単位のほか、日本語の reading, composition, conversation, 日本文学、日本歴史等をさらに30単位以上取得することを骨子としているが、日本語を専攻としない学生がこれらの単位を、外国語として、或いは minor として取ることももちろん認められている。

この中、日本語の基礎単位30をコース番号のままあげれば次の通りである。

Jpn 60, 61, 62. First-Year Japanese. 5 credit hours each term.

An introduction to Japanese: elementary reading, writing, and conversation. Stress on grammatical patterns and the presentation of characters and the syllabary.

Jpn 104, 105, 106. Second-Year Japanese. 5 credit hours each term.

The increased use of characters and grammatical patterns: designed to build fluency in reading, writing, and conversation.

いうまでもなく Jpn 60 は Fall Term にはじまる日本語の一番最初のクラスで、この単位を取得した者は、Winter Term の61に進み、Spring Term の62で終る。そのあとは二年目に移って、同じように、104から106までの単位を取っていくことになるのである。

この Jpn 60 の三つのクラスの中、毎日9時30分から10時20分までのクラスに私は出ることにした。担当は、津田を出てから Univ. of Oregon で Master を終えた旧知の Mrs. Yoko McClain で、彼女の下に各クラス毎に一人ずつ、三人の Teaching Assistant がついている。学生数はこのクラスで約25名、男女同数で、日系人と見られる学生も四、五人混っていた。

最初の日、どこのクラスでもやるように、まず Fall Term の、9月30日の授業開始から12月16日の期末試験に至るまでの schedule を渡される。

1st Year Japanese, Tentative Schedule, Fall 1974Textbooks: *Intensive Course in Japanese*, Vol. 1, Dialogues and Drills, part 1.*Intensive Course in Japanese*, Vol. 3, NotesSupplementary textbooks: *Intermediate Japanese Reading Aids*, Vol. 1*Intermediate Japanese Reading Aids*, Vol. 2

Sept. 30(M)	Introduction; <i>hiragana</i>	Nov. 11(M)	Lesson 11(Tape No. 14)
Oct. 1(Tu)	Classroom Expressions (Tape No. 2)	12(Tu)	Lesson 11
2(W)	Lesson 1 (Tape No. 3)	13(W)	Lesson 12 (Tape No. 15)
3(Th)	Lesson 1	14(Th)	Lesson 12
4(F)	Lesson 1	15(F)	Quiz
7(M)	Lesson 2(Tape No. 4)	18(M)	Lesson 13 (Tape No. 16)
8(Tu)	Lesson 2	19(Tu)	Lesson 13
9(W)	Lesson 3 (Tape No. 5)	20(W)	Lesson 14 (Tape No. 17)
10(Th)	Lesson 3	21(Th)	Lesson 14
11(F)	Quiz	22(F)	Lesson 15 (Tape No. 18)
14(M)	Lesson 4 (Tape No. 6)	25(M)	Lesson 15
15(Tu)	Lesson 4	26(Tu)	Review, Lesson 11-15 (Tape No. 19)
16(W)	Lesson 5 (Tape No. 7)	27(W)	Quiz
17(Th)	Lesson 5	28(Th)	Holiday
18(F)	Quiz	29(F)	Holiday
21(M)	Lesson 6 (Tape No. 8)	Dec. 2(M)	Lesson 17 (Tape No. 20)
22(Tu)	Lesson 6	3(Tu)	Lesson 17
23(W)	Lesson 7 (Tape No. 9)	4(W)	Lesson 18 (Tape No. 21)
24(Th)	Lesson 7	5(Th)	Lesson 18
25(F)	Quiz	6(F)	Quiz
28(M)	Lesson 8 Tape No. 10)	9(M)	Lesson 18 (Tape No. 22)
29(Tu)	Lesson 8	10(Tu)	Lesson 18
30(W)	Lesson 9 (Tape No. 11)	11(W)	Lesson 19 (Tape No. 23)
31(Th)	Lesson 9	12(Th)	Lesson 19
Nov. 1(F)	Quiz	13(F)	Review
4(M)	Lesson 10 (Tape No. 12)	16(M)	Final Examination
5(Tu)	Lesson 10		
6(W)	Review, Lesson 1-10 (Tape No. 13)		
7(Th)	Review, Lesson 1-10		
8(F)	Midterm Examination		

毎週月曜日から金曜日まで、毎日50分の授業時間は厳格に守られ、休講もまず無いと考えてよいから、中間試験と期末試験、それに11月28, 29両日の感謝祭の休日を除くと、正味授業時間は、50分×52回ということになる。これは、日

本の大学での外国語 2 単位, 一年分の授業時間にほぼ匹敵すると考えてよいであろう。

このクラスでは, この Fall Term の schedule のほかに, 一週間毎の, 授業の内容や毎日の宿題などを書きこんだ週間予定表も学生達に渡していた。それによると, この最初の日, 9月30日の予定は主として orientation で次のようになっている。

Monday, September 30, 1974

I. General Introduction to the class

How much work to be expected: a. Study the text
b. Language Lab

Organization of the class: 2 days grammar
2 days intensive drill
1 day written quiz

Final grade will be based on: a. Class attendance and participation
b. Daily assignment
c. Lab attendance
d. Weekly quiz
e. Midterm Examination
f. Final Examination

Textbooks

II. Brief introduction to the Japanese language

III. Introduction to the Japanese writing system-*hiragana*

IV. Assignment for Tuesday

1. Learn the first 10 *hiragana* (pp. 25-27) あいうえお かきくけこ
2. Read: Intensive Course in Japanese, Part 1, Introduction (pp. 11-16)
Intensive Course in Japanese, Part 1, Romanization (pp. 17-18)
Classroom expression, I, II, III.

この General Introduction の中で, 授業に出席するための準備として, 教科書の予習をあげているのは当然のこととして, Fall Term Schedule にもあるように, これと併行して一日おきに必ず, 任意の時間に Language Lab での実習を課しているのは注目に値する。これは compulsory であるので, これを含めると実質的な授業時間は毎日50分をかなり上まわることになるであろう。

クラスの構成は, 最初の一週間を除き, 二週間目からは週に二回, 月曜日と水曜日が reading と文法, 火曜日と木曜日には日本語だけの intensive drill

で、この時間には学生達に英語を一切使わせない、最後の金曜日にはそれまでの学習の総復習と試験で終るといようなことが伝えられた内容であった。

このあとは予定表通り、日本語や平仮名についての簡単な説明があって、最後に翌日の授業のための宿題の説明で時間が終った。宿題は、まず平仮名を10字、あいうえお、かきくけこ、を濁音を含めて完全に覚え、読めるだけでなく書けるようにしてくる、それと教科書の Introduction や Romanization の説明などを読んでくることであった。外国語学習に予習や宿題はつきものであるが、特にアメリカの大学の場合、毎日の宿題が授業の重要な一環をなしていることに注目しなければならない。Romanization にしても、これは CVC 型の音節構造に慣れきったアメリカ人学生に、CV 型の日本語の音節構造を理解させるのにも重要で、よく日本人が感違いするように、日本語でもローマ字にしさえすれば英米人がすらすら読めるというものではない。しかし、こんなことも、学生達には、宿題の範囲内で処理させておくのである。

Ⅱ. FALL TERM (第1週)

Orientation がすんでその翌日、火曜日にいよいよ最初の学習がはじまった。小人数のせいもあって at home な雰囲気である。出席がとられてまず行なわれたのは平仮名の dictation であった。学生達は宿題で10字については前日のうちに読み書き出来るようになっている筈だから、早速それを試めすのである。問題は次のように与えられた。

- a) 1. うえ 2. おい 3. あい 4. あう 5. あおい
- b) 1. あか 2. うく 3. おけ 4. こい 5. かく
- c) 1. がいこく 2. がか 3. いぎ 4. けが 5. ごご

おそらく学生達の大部分にとっては、生まれてはじめて書く文字であろうが、金くぎ流ではあっても思ったより出来はよい。紙に書かせたあとで、何人かに黒板にも書かせて、[いぎ]を[いい]と間違ったりするのを Mrs. McClain が正し、意味を説明するという作業を続ける。殆んど英語ばかりで、点の打ち方一つにもこまかく気を配りながら要領よく教えこんでいかなければならない。根気のいる painstaking な仕事である。そのために後半の classroom expres-

sions は宿題の I, II, III に含まれている15ばかりの表現が全部 cover 出来ず、次の6つだけで終わってしまった。

1. いってください
2. すみません、いってください
3. もういちど、いってください
4. みんないっしょに いってください
5. きいてください
6. もういちど きいてください

このような表現の意味そのものは、予習の段階でテキストの注などにより何とか理解してくるが、はじめての日本語で学生達は五里霧中の表情である。それぞれの文に共通な——てください が please do something の意味で mild command をあらわす、ということぐらいで、動詞の形などこまかい説明にはもちろんすぐ入れるわけではない。

第一週の残りの三日間、水、木、金の授業も、平仮名を覚えさせることに重点をおいていた点ではこの火曜日の授業と同様である。毎日平仮名10字ずつと dictation もくり返していった。金曜日には、さらに促音や拗音も含めて、ま、み、む、め、も、や、ゆ、よ、まで進み、残りの、ら、り、る、れ、ろ、わ、を、ん、は月曜日までの宿題になっていたから、平仮名の全部は、読み書きとも、最初の一週間で終わらせたことになる。この間、アメリカ人学生が dictation で書き間違えたものには次のようなものがあった。

すし→つし ながい→なかい へた→へだ
 なに→なね いった→いた どっち→どち
 ぎゅうにゅう→ぐゆぬ ちゅうがっこう→ちうがこ

この間にはまた、平仮名の practice と併行して、日本文の基礎的構造についてもいくつか説明がはじめられている。

(1) わたし は がくせいです

においては、I am a student. と異なる語順と意味の対応関係を示し、“は”は主語を示す particle である、am にあたる“です”は copula で、日本語では動詞はすべて文の末尾にくる、冠詞はない、などの特徴を、

rules: 1. verb—at the end 2. no article 3. particle と板書して教えた。

(2) わたし は せんせいではありません

の文では、(1)の構文、わたしはせんせいです、と対比させ、

desu=de arimasu——positive

de (wa) arimasen——negative

と書いたあと、ですはでありますの short form で、ますは always positive,
ではありませんはその否定形である、とさりと説明されていたが、ではのは
は、アメリカ人学生にどのように受けとめられたのか気にかかるところであっ
た。^{a)}このような“は”一つにしても、これを何時、どこで、どのようにして導
入していくかということは、教授法上の重要な問題になるからである。

このようにして最初の5日間の授業が終り、学生達は平仮名が一応読み書き
出来るようになった上で、大体次のような表現が理解出来るようになっていた。

あなたは にほんじんですか

いいえ、わたしは にほんじんではありません

あなたは せんせいですか

いいえ、わたしは せんせいではありません

あなたは ちゅうごくじんですか

いいえ、わたしは ちゅうごくじんではありません

あなたは あめりかじんですか

はい、わたしは あめりかじんです

あなたは かいしゃいんですか

いいえ、わたしは かいしゃいんではありません

Ⅲ. FALL TERM (第2週)

10月7日(月)は二週目の第一日で、この日までに学生達は平仮名を一応全
部 master したことになる。dictation も、それまでは単語だけであっ
たのが、この日からは文に変わった。

1. あなたは なにじんですか

2. わたしは あめりかじんです

3. あなたは いぎりすじんではありません

4. あなたは せんせいではありません

(3) 一般的には dewa arimasen は de arimasu と対比させないで、desu の
negative form であるただけ教えているようであるが、この方が混乱は少ないよう
に思われる。

ここで目についた誤りは、あなたは→あんなたは、いぎりすじん→いにりすじん、のようなものである。これは興味のある誤りで、音声概念と連結して記憶されていない間は、アメリカ人学生にとって案外これが純粋な聞きとり方であったのかも知れない。日本人学生に対して、仮りに、あんなたはいにりすじんではありません、と言ったとしても、彼等はそれを、あなたはいぎりすじんではありません、としてしか聞きとる能力がないのが普通だからである。

平仮名が一通り読み書き出来るようになると、クラスワークの point はテキストの reading に移ってくる。そして reading ではごく初歩の段階から、予想以上にいろいろと教授上の問題があることがわかってきた。

例えば、テキストのはじめの方に出ている、

この ひととはだれですか

その ひととはだれですか

あの ひととはだれですか

を教える場合、この、その、あの、は日本語でそれぞれニュアンスが違うが、このひと(=this person)、あのひと(=that person)はよいとしても、そのひと、の説明は楽ではない。そのひと、も that person だといえ⁴⁾ば、そのひと、と、あのひと、はどう違うのかという質問がすぐに飛んでくる。

(1) じょんそんさん は あめりかじんです

(2) すみすさん も あめりかじんです

においては、(2)のすみすさんもの“も”は、Mr. Smith is an American, too. の too にあたる、と教えると、(1)じょんそんさんはの“は”は主語をあらわす particle であった筈だから、(2)が、すみすさんはもあめりかじんです、とならないのは何故か、と聞かれる。

(3) このひとは やまかわせんせいです。

(4) わたしは べいりーです。

(5) はじめまして、どうぞよろしく。

(4) 次のように区別することが考えられる。

そのひと=that person who is near the person addressed to, the person in question, the person you are talking about.

あのひと=that person over there, that person we are speaking of.

のような表現では、もうどうしても、英語にはない日本語独特の慣用の世界に入っていかなざるを得ない。やまかわせんせい、は英語では Mr. Yamakawa だというだけではすまずことは出来ないであろうし、どうぞよろしく、では very idiomatic な表現で、more or less, please do me a favour にあたる、と説明しても何となく要領を得ないであろう。これは、英語を学ぶ日本人学生の場合にもよく問題になることだが、お邪魔します、失礼しました、お世話になりました、などという日本的挨拶と同様に、英語などに訳せるものではないのだから、挨拶の仕方そのものが違うのだということを納得させるほかはない。日本語教育ははじめからわれわれの英語教育以上に、特に文化教育の色彩が濃くつきまとうようであった。

このようにして教えこんだ dialogue (テキストの Lesson 2) は、予定表にしたがって、L. L の Tape No. 4 でさらに各自 hearing と speaking の練習をさせた上で、翌日、火曜日のクラスに臨ませる。英語の使用が一切許されない日本語だけの drill のクラスで、この週からは、reading の Mrs. McClain と oral drill の T.A., Mrs. Morris が一日交替で学生達の指導に当ることになった。Mrs. McClain に習った日本語の表現を、Mrs. Morris の oral drill で定着させるという方針であるが、T. A. の力量が伴わなければ、この連携は案外容易ではない。この日の drill は Mrs. Morris の不慣れのせい、クラスが少しだらけた。

水曜日は再び Mrs. McClain の時間で、その授業の主な内容は次の通りである。

1. Memorize vocabulary, Lesson 3, pp. 114-115
2. Read and study: Key sentences, p. 113
Dialogues, pp. 116-119
Notes, pp. 98-101
3. Assignment: Review, Lesson 3.....Language Lab.
Write out in *hiragana*, p. 100, Exercises 1-10

この日も大体 dialogue の reading や説明が中心であったが、少しずつ慣れてくるにしたがって進度も速くなり、読む量も日一日と多くなっていく。学生達はこの日の一時間で、次のような dialogue の意味を理解し、たどたどし

く読んでいった。

このはなはさくらですか

はい、そうです、そのはなはさくらです

そのはなもさくらですか

はい、このはなもさくらです。このはなも、そのはなもさくらです

せんせい、あのはなもさくらですか

いいえ、ちがいます。あのはなはももです

このたてものは がっこうですか

はい、このたてものはしょうがっこうです

あのたてものは なんですか

あのたてものは きょうかいです

ゆうびんきよくは どのたてものですか

ゆうびんきよくは あのたてものです

あのおとこのひとは だれですか

あのひとは おおきさんです

あのおんなのひとは だれですか

あのひとは たなかさんです

あのひとたちは にほんじんですか

そうです、おおきさんも たなかさんも にほんじんです

さとうさんは どのひとですか

さとうさんは あのひとです

その翌日の木曜日には、また T. A の担当で以上の dialogue を中心に oral drill が行なわれ、そして金曜日には最初の週末試験である。このあとは毎週金曜日ごとにテストがくり返されることになるのであるが、それがどのようなものであるか次に示してみよう。これは、学生達が習い覚えたばかりの平仮名で答案を書いた二週間目の、はじめての試験であった。

いちねんにほんごくいず

つぎのぶんをよんで にほんごで こたえなさい

1. あなたはなにじんですか

2. じょんそんさんは いぎりすじんですか

positive answer →

negative answer →

3. きょうかいは どのたてものですか

4. そのはなも このはなも さくらですか

positive answer →

5. あのひとは おとこのひとですか

negative answer →

6. そのひとはだれですか (Use any Japanese surname)

7. やまかわさんは どのひとですか

8. ベイリーさんとすみすさんとべるな-るさんは あめりかじんですか

(Answer in one sentence)

ベイリーさん } あめりかじん
すみすさん }

べるな-るさん = ふらんすじん

9. あのたてものはなんですか (elementary school)

N. FALL TERM (第 4 週以降)

日本語で書かせたり、しゃべらせたりする練習で苦勞することの一つは、特にこの時期あたりから *particle* の適当な用法を理解し出来るだけ早く慣れさせなければならないことである。

例えば、

- (1) つくえのうえに えんぴつがあります
- (2) はこのなかに ちょーくがあります
- (3) いすのしたには ほんはありません

において、(1)のつくえのうえに、の“の”は、英語の 's のようなものであり、“に”は *at* または *in* であると説明されていたが、“on the desk”と意味を対応させて理解しようとする学生達には、これでは納得し難いかも知れない。えんぴつがあります、の“が”は *very close to* “は”、である、といっても、それでは、どういふ場合が“は”で、どういふ場合が“が”であるかと聞かれれば説明は容易ではない。⁵⁾これについては、(2)(3)の文の対比で、ちょーく

- (5) 次のような説明の仕方もある。

Since *wa* and *ga* are apparently used after the subject of a sentence, the difference between the two is one of the puzzling problems in learning Japanese. The solution, however, is not very difficult, although there are some difficulties in applying the rules because of the difference in the way of thinking.

The fundamental difference between the two lies in the position of emphasis they lay. *ga* emphasises the subject of a sentence whereas *wa* emphasises the predicate.

Kore *wa* hon desu.

Kore *ga* hon desu.

In the above two sentences there is, of course, a difference in meaning, although both may be rendered into English as “*This is a book.*” However, in reading the English rendering one should lay emphasis on *a book* for the first sentence and *this* for the second as

This is *a book*.

This is a book.

Naganuma, N., *First Lessons in Japanese*, Kaitakusha, 1952, p. 37.

がの“が”は positive をあらわし、ほんはの“は”は makes the sentence negative である、と説明されたが、それだけでは、

(2) ちょーくははこのなかにあります

(3) ほんがいすのしたにはありません

のような表現が気にかかる。(3)の、いすのうえには、の“には”も、アメリカ人学生にはわかりにくいところで、(1)の、うえに、の“に”とどう違うのかと早速の質問であった。Mrs. McClain は、にはにと考えてよいが、“には”の方が“に”よりも implication が多い、しかしその相違については、just forget about it for the time being、といった答え方をしている。このような微妙なニュアンスの相違に、この段階で初学者を迷いこますことは、たしかに賢明ではないであろう。それよりもやはり、慣用は慣用として、標準的なものを出来るだけ多く、drill をくり返すことにより条件反射的に頭の中へ植えつけていくほかはないようである。そのためにこのクラスでも、しばしば次のような練習を行なった。

Fill in the blanks with appropriate particles.

1. My house is in Eugene.
わたし() うちはやじーんです。
2. Are you an American?
あなた() あめりかじんです()。
3. Mr. Johnson is not a Japanese.
じょんそんさんはにほんじん() () ありません。
4. Both this flower and that flower are cherryblossoms.
このはな() そのはな() さくらです。
5. There are newspapers and chalks over there.
あそこ() しんぶん() ちょーくがあります。
6. This elementary school child is our neighbor's child.
このしょうがくせいわたし() となり() うち() こどもです。
7. Whose book is this?
これはだれ() ほんですか。
8. This notebook is mine.
こののーとはわたし() です。
9. There are such things as books and pencils on the desk.
つくえ() うえ() ほん() えんぴつがあります。
10. There is nothing under the chair.
いす() した() なに() ありません。

11. There is a black umbrella over there, isn't there?

あそこ() くらいかさがありません()。

もちろんこの時期においても重要なのは **particle** だけではなく、動詞の変化をはじめ、名詞、形容詞、副詞の日本語独特の用法など、ことごとく問題にならないものはない。はじめのうちは、日本文の理解という大きな枠組の中で、浅くひろく、全体的なバランスをとりながら、概略をそれも出来るだけ体系化して呑みこませていく必要があるが、それと同時に、やはり、**vocabulary** をふやすことが一層大切になってくる。そのための練習も、したがって、次のような形で殆んど毎日のように行なわれた。

a) Match the English words to the Japanese words.

- | | | |
|---------------------|-----|------------|
| 1. new student | () | 1. かいしゃいん |
| 2. diplomat | () | 2. いざりすじん |
| 3. senior | () | 3. りゅうがくせい |
| 4. company employee | () | 4. しんにゅうせい |
| 5. foreign student | () | 5. がいこうかん |
| 6. English man | () | 6. せんぱい |

b) Give the English words which corresponds to the following Japanese word.

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. たんごちょう | 6. かんたんな |
| 2. かんじ | 7. あたらしい |
| 3. わえいじてん | 8. みじかい |
| 4. きて | 9. じょがくせい |
| 5. べんりな | 10. でんしゃ |

c) Translate the following sentences or phrases into Japanese.

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. It is good. | 6. It was not good. |
| 2. It is fairly good. | 7. good book |
| 3. It is not good. | 8. book which is not good |
| 4. It is not too good. | 9. book which was not good |
| 5. It was good. | 10. good and big book |

このような、そしてこの程度の学習を終えて、学生達は6週目最後の金曜日に、日本の前期末試験にあたる **Midterm Examination** を受けることになった。Fall Term は11週なので、このあと7週目からは学期の後半に入る。この時点で学生達がおおよそその意味をとりながら何とか読めるようになっていたのは、次のような程度の文である。

わたしはまいあさしちじにおきます。そしてしちじはんごろあさごはんをたべます。それからほんごのくらすにいきます。にほんごのじゅぎょうはげつようび、かようび、すいようび、もくようび、きんようびで、まいあさくじはんにはじま

ります。どようびとにちようびはがっこうはやすみです。わたしはまいにちひるごはんをりょうのしょくどうでたべます。ごごはあめりかのれきしのくらすがあります。そのれきしのくらすのあとさんじはんごろうちへかえります。ばんごはんはろくじはんごろたべます。ばんごはんのあととしょかんにいきます。そしてしちじはんごろからじゅうじはんごろまでさんじかんぐらいべんきょうをします。わたしはまいばんじゅういちじはんごろねます。

これまでは平仮名ばかりであったが、8週目あたりから、外国の人名や地名、外来語などでは片仮名を使いはじめた。平仮名のときのように、一週間たらずで覚えさせたが、シとツ、ソとシの区別などはどうもはっきりしない。やはり dictation で、バス、クラス、ラヂオ、アパート、ジョンソン、スミス、アメリカ、ピアノ……などと書く練習をくり返す。一、二、三、四……九、十の漢数字を覚えさせたのもこの頃である。

9週目では、それまでに少しは出ていたが、ピンポンをする人 (=the person who plays ping pong), 早く起きた朝 (=the morning when I got up early), 授業のない日 (=the day when there is no class) などの関係代名詞や関係副詞の日本語表現、10週目では、のる、たべる、ならう、きく、ねる、などの動詞を、*te*-form (のって、たべて、ならって、きいて……) と *nai*-form (のらない、たべない、ならわない、きかない……) に分けて変化させること、などがクラスワークの一部であった。

あ、い、う、え、お、から習いはじめて2カ月半、毎日のように drill と quiz をくり返しながらか Fall Term も終りに近づく頃には、テキストの読み方も何となく板についてきた感じになる。たどたどしさはまだ幾分抜けきれないが、どの学生が読んでも、それはまぎれもなく日本語であって、聞いている私が意味をとり違えることも殆んどない。日本語教育におけるアメリカ人学生の立場は、英語教育における日本人学生の立場に比べて、やはり発音の点では、はるかに楽である。⁶⁾ たった五つの母音と、CV 構造の子音だけに慣れきった日本人学生の英語 reading の発音では、おそらく3年たっても、この程度には understandable ではないであろう。

(6) 武本昌三「Reading の指導法に関する若干の問題点について」『人文研究』第45輯参照。

アメリカ人学生が二カ月半日本語を習ったあとの学習到達度が実際にはどの程度のものか、客観的に示すことはむづかしいが、一つの判断の資料として Fall Term 最後の期末試験の問題を次に示しておきたい。学生達はこのような試験で、少なくとも 100 点満点に換算して 60 点以上をとり、次の Winter Term の Jpn 61 に進んでいくことを期待されるのである。

にほんご一ねん きまつしけん (十二月十六日)

I. Choose the correct expression.

1. あそこ { に () } で { () } ねこが { あります () } { () }
2. { きれいで () } { () } { おおきく () } { () } うちです
{ きれくて () } { () } { おおきく () } { () }
3. あなたのりょうは { しずか () } { () } ですか
{ しずかな () } { () }
4. かみが { にほん () } { () } { います () } { () }
{ にまい () } { () } { あります () } { () }
5. { この () } { () } の一と { に () } { () } あなたのなまえを { かいて () } { () }
{ これ () } { () } { で () } { () } { かきて () } { () } ください
6. がっこう { で () } { () } { なに () } { () } なに { を () } { () } になっていますか。
{ に () } { () } { が () } { () }
7. まいにちラジオ { に () } { () } { () } ききます。
8. ほんが { さんぽん () } { () } { () } { () } ありません。
{ さんざつ () } { () } { だけ () } { () }
9. にちようびは { おそく () } { () } { () } おきます。
{ おそい () } { () }
10. このホテルはりっぱ { な () } { () } { () } { () } です。
{ ではない () } { () }
11. これは { ちいさいで () } { () } { () } { () } べんり { の () } { () } { () } じびきです。
{ ちいさくて () } { () } { な () } { () }
12. いまくじ { ぐらい () } { () } { () } でしょう。
{ ご () } { () } { ろ () } { () }
13. せんせいが { いちにん () } { () } { () } { () } います。
{ ひとり () } { () }
14. きょうは { さむくない () } { () } { () } { () } です。
{ さむくない () } { () }
15. { どれ () } { () } { () } { () } ひとがたなかさんですか。
{ どの () } { () }
16. わたしのうちはだいがくに { ちかく () } { () } { () } { () } です。
{ ちかい () } { () }
17. さかな { を () } { () } { () } { () } { () } ください。
{ が () } { () } { にほん () } { () }
18. きのはさんじかん { ぐらい () } { () } { () } { () } べんきょうしました。
{ ご () } { () } { ろ () } { () }
19. ふとうは { よんまい () } { () } { () } { () } あります。
{ しまい () } { () }

II. Fill in the blanks with appropriate words (mostly particles).

1. うち——でたのはゆうがたでした。
2. ユジーン——すんでいます。
3. でんしゃ——のってきました。
4. がっこうははちじはん——はじまります。
5. ふろ——はいます。
6. ラジオ——ききます。
7. うち——かえます。
8. しんぶん——よみます。
9. としょかん——いきません。
10. アパート——かりてすんでいます。
11. あなたはがっこう——なに——なっていますか。
12. これ——だれ——ほんですか。
13. オレゴンだいがく——かよっています。
14. きのうわたし——かったくるまはダットサンです。
15. なん——ほんですか。
16. ジョンソンさん——スミスさん——アメリカじんです。
17. どこ——いますか。
18. このさんじゅうえん——きって——かってください。
19. たなかさんはきょうえいご——はなしました。
20. つくえ——うえ——ほんやえんぴつがあります。
21. ながい——とみじかい——があります。
22. これはだいがく——いちばんおおきいへやです。
23. ふゆやすみは十二がつ二十一にち——一がつ五か——です。
24. 八じ十五ふん——と七じ四十五ふん——はおなじです。
25. ここはふべん——ところです。
26. つぎ——えきはポートランドです。
27. どれ——あなたのまんねんひつですか。

III. Fill in the blanks with appropriate interrogative pronouns (or interrog. pronoun plus particle).

1. What is this? これは——ですか。
2. Which one is yours? ——があなたのですか。
3. Where are you going? ——へいきますか。
4. I am going nowhere. ——いきません。
5. Who is the person over there? あそこにいるのは——ですか。
6. What kind of a book are you reading? ——ほんをよんでいますか。
7. There is some one here. ここに——います。
8. Which direction is north? ——がきたですか。
9. There is nothing. ——ありません。
10. Who is in the room? ——へやにいますか。

IV. Translate the following relative clauses into Japanese.

1. the bus which goes to the university
2. the movie which we saw yesterday
3. the person who is drinking coffee over there

4. the woman who *is playing* the piano
5. the teacher who *came* from Japan
6. the place where you *were living* last year

V. Answer the following questions in Japanese.

1. あなたはなににじんですか。
2. きょうはいいてんきですか。
3. きょうはなんがつなんにちですか。
4. あなたはいまがっこうでにほんごをならっていますか。
5. にほんごのクラスはまいにちなんじにはじまってなんじにおわりますか。
6. あなたがいまつかっているにほんごのほんはいくらでしたか。
7. にほんごはやさしいですか。
8. あなたはまいにちなんじかんぐらいほにんごのべんきょうをしますか。
9. にほんごのクラスにはがくせいがなんにんいますか。
10. このクラスにはいすがいくつありますか。

VI. Translate the following Japanese passages into English.

1. たなかさんはいまおんがくがっこうのがくせいでピアノをならっています。まいにちスプリングフィールドからバスでがっこうにかよってきます。たなかさんはにほんじんで、いまブラックさんというアメリカじんのがくせいといっしょにやすくてちいさいアパートにすんでいます。
2. きょうのうちにちようびはいちにちじゅうとてもいいてんきでした。ですからわたしはくるまにのってこどもをふたりつれてフローレンスまでいきました。うちをでたのはあさの十じごろでした。十一じはんにフローレンスについて、それから十二じごろひるごはんをたべました。かいがんのすなはまで一じかんぐらいあそびましたが、みずがたいへんつめたいでした。五じごろうちにかえりましたが、とてもつかれました。ばんごはんをたべてふろにはいってすぐねました。

V. SPRING TERM (6ヶ月～9ヶ月)

一年目 Jpn 62クラスは3月27日にはじまった。Schedule は Jpn 60 と同じように、6週目の金曜日(5月3日)に Midterm Examination があり、そのあと5週間の学習を経て、6月5日の Final Examination で終る。前年の9月30日にはじまった 1st Year Japanese はこれで9ヶ月目に全部終了することになるのである。

Winter Term, Jpn 61のクラスでは、まだ平仮名と片仮名の reading が主であったが、後半から少しずつ漢字の練習もはじめるようになっていた。この Spring Term では、はじめの一週間くらいを使って、それまでの学習の総まとめのようなことをやり、二週間目からは新らしいテキスト⁷¹に入った。その後

の授業の進め方は次の通りである。

After April 8, 1974 (Monday)

Start the Hibbett, Itasaka text from Lesson 1

I. for *Monday, Tuesday, Wednesday*

1. Prepare minimum two pages.

- a. Try reading the text as fluently as possible--use lab facility. It is essential to be able to read fluently.
- b. Write out your translation every day.
When you write out the translation, it will become clear to yourself which part has given you trouble in translating the passages.
- c. The classes will be conducted in Japanese in spring term except when the complex grammatical points have to be explained.

II. for *Thursday*

- a. *Kanji* quiz b. Oral drill

III. for *Friday*

- a. Grammar quiz

それまでと違って、毎週金曜日の週末試験のほかに毎週木曜日に漢字 Quiz が加わったが、4月11日に行なわれたその第一回目の試験は次のようなものである。

漢字クイズ (第一課)

I ^{かんじ} 漢字にふり仮名^{がな}をつけなさい。

1. 先生はがく生の目上です。
2. わたくしは田中と申します。
3. 今日はお一人ですか。
4. 二人で上がりました。
5. あの人は一日中べんきようばかりしています。
6. 八月はわたくしたちのなつやすみです。
7. 下田さんはえいごが分りません。
8. 日本ごをはなすとき、わたくしたちは人を上下に^{かんが}分けて考えなければなりません。

II 漢字をかきなさい。

1. (^{しろ}) いセーターをきている。
2. ここが (^{いり}) (^{ぐち}) です。

(7) Hibbett and Itasaka, *Modern Japanese—A Basic Reader*, Harvard Univ. press, 1974.

これは、Vol. I (Vocabularies and Notes), Vol. II (Japaness Texts) の二冊からなっていて、アメリカではもつとも popular な日本語教科書の一つである。「日本現代文読本」と和訳のタイトルがついている。

3. (こん) (げつ) の (とう) (か) にきました。
4. (じ) (ち) にえいごをはなす。
5. (ひと) (うち) には言え^いません。
6. (はい) って (くだ) さい。
7. その (うち) またきます。
8. (い) (だ) さんはわたくしより八つ (はち) です。

ふり仮名をつけさせる問題では、今日(きょう)をこんいち、二人(ふたり)をふったり、申しますをもします、と書いた学生がいたが、これは、彼等が、Konnichi, futari, mōshimasu とローマ字で読み方を覚えていくのとの関係がありそうである。

下田さんは固有名詞である以上しもたでもあり得るわけだが、これを学生達にも許容するかどうかは問題であった。こんな些細なことも、八月をはちげつと書き、一日中をいちにちちゆうと書いた二、三の学生に対する指導に微妙な影響を与えかねないからである。

漢字を書く問題での間違いでは、自、白の / が \ になっていたり、由が申となっていたり、こんげつが金月、とうかが土日、ひとくちが人口となったりした。このひとくちなどは、学生の頭に、英語の more than tongue can tell との連想が働らいたのであったとしたら、訂正にもそれなりの配慮が必要であるかも知れない。

漢字クイズと同じく毎週木曜日に行なわれる oral drill は、Fall Term や Winter Term のように、テキストの内容について話し合う場合もあるが、このクラスでは多分に free talking の色彩が強くなっている。担当者である T. A の Mr. Kim と学生達との間の最初の会話の一部を参考までに次に再現してみよう。

お早うございます、今日は何曜日ですか。

今日は木曜日です。

あなたは春休みに何をしましたか。

私は公園に行きました。

面白かったですか。

.....

あなたは何をしましたか。

春休みに Oregon Coast へ行きました。

何日ぐらいですか、一日、二日、三日?

三日。

ここからどのくらいかかりましたか。

2時間くらい。

あなたは何をしましたか。

Minnesota へ行きました。

何で行きましたか。

飛行機で行きました。

この間日本の映画があったでしょう。大へん面白い映画でした。それは家族が九州から北海道まで旅行する映画です。

貧乏な人達でお金がないから飛行機ではなくて汽車で行きます。見るだけで疲れました。あなたは映画を見ましたか。

……………わかりません。

あなたはどうか。えいがを見ましたか。

……………いません。

あなたは働きましたか。

Ashland へ行きました。

play を見ましたか。

……………はい。

そのほかに何をしましたか。

……………。

過去6ヶ月の学習で学生達の間にはやはり学力の較差が生じているので、かなりすらすら答えられる学生がいる反面、はい、いいえ、だけで逃げる学生もいる。言っていることは大体わかるようであるが、まだまだ適確には答えられない様子である。われわれの英語教育でよく問題にされる reading ability と speaking ability との gap がここでも問題になりそうであった。たまたまその時に読んでいたテキストの第一課は会話になっているので、その一部を次に示しておきたい。

A もう御存じの方ばかりでしょう。

B いいえ、一人だけまだお目にかかったことのない人があります。

A どの人ですか。

B あの白いせーたーの人は田中さんですね。田中さんのとなりの人ははじめてです。あの人にはまだお目にかかったことがありません。

A あれはほわいとさんです。

B いいえ、ほわいとさんはよく存じております。入口に近い方に立っている人です。

A 田中さんと今田さんのあいだの人ですか。ぶらっくさんですよ。十日ばかり前にあめりかから来られた人です。

- B ぶらっくさん、^{わたくし}私^{くさか}は日下と申します。どうぞよろしく。
- C はじめまして、ぶらっくです。こちらこそどうぞよろしく。
^{くさか}日下^{なまえ}さんのお名前^しはどういう字ですか。
- B 字はとてもやさしいのです。「日」の「下」と書いて「くさか」と読みます。
- C 「下」を「か」と読むのはしっていますが、「日」も「くさ」と読むのですか。
- B そうです。^{くさか}日下^{とき}の時だけ「くさ」と読むようです。ぶらっくさんは漢字を御^{かんじ}存^ごじなのですか。……………

このような会話にも見られるような、日本語独特の敬語の使い方については、学生達は毎時間のように苦勞していたようである。単語毎に、

見	る	{honorific	ごらんになる
		{neutral	みる
		{humble	はいけんする
着	る	{honorific	おめしになる
		{neutral	きる
		{humble	——
食	べる	{honorific	おあがりになる。めしあがる
		{neutral	たべる
		{humble	いただく

というように覚えさせていき、そしてそれに対して次のような drill を行なう。

I Change the underlined verbs into honorific or humble forms, depending on the case.

- あなたはもうきょうのしんぶんをよみましたか。
- 山本先生がそういいました。
- そんな手紙をかきましたか。
- わたしがこのしごとをしますから、あなたはあのしごとをしてください。

II Change the underlined expressions into the neutral form, and translate the sentence into English.

- きのうのばん、金田先生は日本のえいがをごらんになったそうです。
- つぎの木よう日にぜひあなたにお目にかかりたいです。
- 中田さんのおじょうさんをよくごぞんじでいらっしやいますか。
- 山中さんのおくさまがとってもきれいなおきものをおめしになっていらっしやいました。

新らしいテキストに入ってから、reading の内容も高いものになり、文中の漢字も課を追ってふえてきた。学生達は彼等用に作られた日本語辞書をひんばんに引きながら、日本語の長文と取組んでいく。そのような学生達に Mrs. McClain は次のようなプリントを配布して読み方の要領を説明した。

HOW TO READ A JAPANESE SENTENCE (SIMPLE STEPS TO FOLLOW)

Many Japanese sentences seem long, but if you know how to read them, they will not seem as impossible to handle as you may have thought. Try the following steps:

I. Find all conjunctions in the sentence. (If there are no conjunctions, simply follow the steps after III.)

II. Divide the sentence into separate short clauses after each conjunction.

III. In each clause:

1. Find the sentence-ending expression, if there is any. (Most of the Japanese sentence-ending expressions come at the beginning of an English sentence.)

2. Find the main verb:

a) If there is a sentence-ending expression, the main verb should precede the sentence-ending expression.

b) If there is no sentence-ending expression, the main verb should directly precede the conjunction.

c) The main verb could be any one of the following:

1. copula

2. verb=transitive, intransitive

3. verbal adjective

Note: Be alert to all the different verb forms:

past, present, positive, negative, tentative, passive, causative, honorific, potential, causative-passive, etc.

IV. Find the subject for the verb.

1. If there is a subject, it will be marked with the particle *wa*, *ga*, or *no*. (Also remember that the subject may be a simple word like *no*, since *no* is often used as a noun.)

2. If there is no subject, you will have to supply it, guesssing from the context.

V. Once you find the main verb and its subject (existent or supplied), they will become the core of the sentence.

VI. The rest will merely be the additions to the core of the sentence. They may be some of the following elements:

1. Sentence-beginning conjunction

2. Adverbs

3. Adverbial phrases } how, when, where, how many (much), etc.

4. Noun modifiers Noun + *no*

Copular noun + *na*

Verbal adjective

Non-conjugating adjective words

Verb=Relative clause

5. Direct object or indirect object etc.

新らしいテキストの第四課まで、30頁あまりを終えたところで Midterm Examination になった。もうすでに、日本語を学びはじめて7ヶ月経過している。この時期の学習到達度を示す一つの参考資料として、少し長いがその全問題と、一女子学生 of 答案をそのまま次に掲げておきたい。ちなみにこの学生の評点は100点満点中91点である。

中 間 試 験 (1974年5月3日)

名前 (Raylene M——)

I. 空所 (blank space) に適当な (appropriate) ことばを入れなさい。

On the 3rd of February of this year I looked around the city of Tokyo with four or five friends. We walked as many as six or seven hours, but because all of the districts were the ones that I have never seen before, it was very beneficial. After returning home, when I read various books, I understood that the districts where we had walked have completely changed during the past one hundred years or so.

今年 (の) 二月三日、私は四、五人 (の) 友達 (と) いっしょに、東京 (の) 町 (に) 方々見て歩きました。六、七時間 (も) 歩きました (が)、今 (まで) 見たこと (が) ない町ばかり (な) ので、大変よい勉強 (に) になりました。家 (に) 帰って (から) いろいろ (な) 本 (を) 読んで見る (と)、私達 (に) 歩いた東京 (の) 町は、この百年 (ぐらい) の間にまったく変ってしまったこと (に) 分かりました。

II. 正しい表現 (expression) を選びなさい。

1. I met Mr. Smith who is a teacher of this university.

この大学の先生 { にしている ()
がしている ()
をしている (○) } スミス氏に会った。

2. I must study all day long.

一日中勉強 { してはいけません。 ()
してもいいです。 ()
しなければなりません。 (○) }

3. My name is Kusaka.

私は日下と { おっしゃいます。 ()
申します。 (○)
申し上げます。 () }

4. Do you know Mr. White ?

ホワイトさんを { 存じておりますか。 ()
ご存じですか。 (○)
お知らせしていますか。 () }

5. We can hardly see it now.

今はほとんど { 見られません。 (○)
見れません。 ()
見ません。 () }

6. We received a telephone call from Mr. Yamada.

山田さんからでんわが { かけました。 () }
 { かかりました。 (○) }
 { かけられました。 () }

7. I have just come on the 10th of this month.

今月の十日に来た { はずです。 () }
 { くらいです。 () }
 { ばかりです。 (○) }

8. I have only three dollars.

お金が三ドル { しかありません。 (○) }
 { だけありません。 () }
 { しかあります。 () }

Ⅲ. 正しい英語の文を選びなさい。

1. アメリカ人が五人来ていました。

Five Americans { came there. (○) × }
 { were there. () }
 { were there. () }

2. 日本についてもっと勉強することにしました。

I intended { () }
 I decided { to study more about Japan. (○) }
 I wanted { () }

3. 今田さんは私の先生だから、私の目上になるわけです。

It is the fact that { () }
 It is likely that { Mr. Imada is my superior, () }
 It means that { because he is my teacher. (○) }

4. 「日本その日その日」という本を読んだことがありません。

I shouldn't read { () }
 I have never read { the book called *Japan, Day by Day*. (○) }
 I cannot read { () }

5. 日本の人口の十分の一が東京に住んでいることになります。

It seems that { () }
 It comes about { that 1/10 of the Japanese population (○) }
 I understand { is living in Tokyo. () }

Ⅳ. 正しい英語の文を選びなさい。

1. 小さい時母に死なれました。

() When I was a child, my mother died.

(○) When I was a child, my mother died, and I had a hard time.

2. 一週間に二十位漢字がおぼえられます。

(○) I can learn about twenty Chinese characters a week.

() I am made to learn about twenty Chinese characters a week.

3. 今日英語で話されました。

(○) He spoke in English today.

() English was spoken today.

4. あの本を読まれましたか。

(○) Have you read that book?

() Could you read that book?

- V. つぎの文を英語に訳しなさい。

1. フランス語の下手な私のおとうとはフランスへはあまり行きたくないと言っています。

I am saying that my little brother who is not skillful in French, won't like to go to France very much.

2. 日本にはとてもたくさん方言があるそうだから、ぼくは何時か日本に行つてその研究をしようと思っています。

Because I understand that in Japan there are many dialects, I will sometime go to Japan and I think I will try to research that.

3. 犬は人の心がよく分ると言われていますが猫はどうですか。

Someone has said that dogs understand well the human heart, but what about cats?

4. 日本語が自由に読めるようになったり書けるようになったりするのとはとてもむずかしいでしょうね。

Japanese is probably a very difficult thing to be able to sometimes read and sometimes write freely.

5. あの人はアメリカ人なのに、メキシコで生まれたので、スペイン語の方が上手なくらいです。

Because that person is an American born in Mexico, his Spanish is almost as good as his English.

6. 私の今住んでいる家の窓から町の向う側のきれいな山が見えます。

From the window of the house in which I am now living, I am able to see the pretty mountain on the other side of town.

この中間試験が終ったあと、テキストは第五課に入った。各課は、本文と、それに続く練習文とから成っていて、この課も例外ではない。恩という題で、それに本文と関連した会話文が練習文としてついている。これらを学習したあとでは毎週金曜日、例によって Quiz が行なわれるのであった。最後のしめくりとして、その本文と Quiz の一部を次に示しておきたい。

第五課 恩⁸⁾

「父母の恩は海よりも深く山よりも高い」という思想は、もっとも大事なものであるとして、長い間人々の間に強い力を持っていました。むかしは今のような学校がなくて、町人や百姓は寺に行って勉強しました。このような学校を寺小屋と言っていました。この寺小屋に入った時、いちばんはじめの時間に教えられる本の第一行目にこの「父母の恩は海よりも深く山よりも高い」という言葉が書いてあ

- (8) この課では本文に入る前に、次のようなプリントを配布して恩についての説明を行った。

On is a beneficence handed down from one's superior. It institutes an obligation (*ongaeshi*) to the superior on the part of the person who receives it or enjoys its benefits. By its very nature, *on* always connotes a hierarchical relation between two specific actors; the obligations that rise from *on* therefore are not part of an abstract code or principle but have at least shades of difference, inasmuch as the specific participants in one relation differ from another. The superior may be of four sorts: (1) a class superior, such as a master who gives employment to a servant, a lord who supports his retainer, or a shogun who grants a fief to a lord; (2) a kin superior, such as one's father or elder brother; (3) an age-status superior, such as one's teacher; (4) a superior in a limited situation, such as the go-between who arranges one's marriage. Whatever his degree of superiority, a person in one of these four classes becomes permanently important to another person by having conferred *on*. The size or durability of the gift has some importance, but more essential is the implicit superior-inferior relationship that colors interaction between giver and receiver from the time onward.

How may one make *Ongaeshi*, or reciprocate for an *on*? An inferior obviously cannot repay his superior in the same coin. Indeed, the repayment is not spelled out and may well depend on the whim of the superior, which puts the recipient of *on* in an awkward and sometimes painful position (at least as viewed by moderns). By late Tokugawa times, two particular sorts of *ongaeshi* came to be singled out which thereafter were stressed by the Meiji government's rule makers as important features of discipline. One was *kō*, or filial devotion; the other was *chū* or personal loyalty to one's lord. Repayment to parents or kin superiors through *kō* was a well-nigh universal obligation on elite and commoner alike. While feudal ranks lasted, every one of samurai class was bound by *chū* to his lord. Loyalty to lord, of course, was hierarchical, and in the late Tokugawa and Meiji periods *kō*, as well, was on the whole an obligation of unilateral devotion upward toward the autarchical head of one's *ie*, although it earlier had carried a connotation of mutual concern between parent and child.

John W. Hall and Richard K. Beardsley

Twelve Doors to Japan

McGraw-Hill Book Company

p. 94

りました。六才ぐらいで寺小屋に入ったのですから、小さな子供でも、この言葉を習って知っていたわけです。知っていたばかりではなく、人々は寺小屋を出てからも、一生の間この言葉が人間の生活の中心となる思想であると信じていました。寺小屋とはちがった学校に行った侍の子にももちろんこの言葉は教えられました。

しかし明治維新になって、西洋の思想が日本の国に入ってきた時、この恩の思想はいろいろな人から問題にされるようになりました。たとえば「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という福沢諭吉の言葉は「人間には上下の区別がない」という思想を教えたものです。それまで男性と女性、父母と子などの間にあると信じられていた上下の区別は、人間性に反すると福沢は言ったのです。恩の思想は人間には上下の区別があるという思想にもとづいて生まれたものですから、もちろん人間性に反するものと考えられたわけです。

それと同じ頃、若い人の間で「天は自らたすける者をたすける」という言葉がよく口にされました。これもやはり恩の思想に反対したものです。

こういう風に、古い思想は明治維新になってから、大変変わって行きました。しかし、今でも「あの人は恩を知らない」とか「あの人には恩がある」とかいう言葉がよく口にされます。

日本人の心には、まだどこかに恩の思想が残っているとも言えましょう。そればかりではなく、上下の区別や男と女の区別もなくなってしまったわけではありません。女の人がどの国立の大学にでも自由に入学出来るようになったのは、今度の大戦がすんでからです。又、女性が男性と同じように選挙出来るようになったのも大戦の後のことです。ですから、日本について何か勉強するのはこういう思想がどんな風に今の日本に残っているかを先ず知っておくことが大事です。

クイズ (五月十日)

つぎの文を英語に訳しなさい。

1. 寺小屋というのは昔の日本で町人や百姓の子が行った学校です。
2. 昨日私がよんだ本の第一行目に「アメリカは世界でもっとも強い国である」ということが書いてありました。
3. 今の日本では、恩の思想はもうあまり強い力を持っていないと思う。
4. しかしむかしは恩の思想は日本人の生活の中心となる大事な思想であると信じられていた。
5. 西洋人は人間には上下の区別がないと信じているから、人間に上下の区別があるという思想にもとづいて生れた日本の恩の思想は大変分りにくいそうだ。

本文のこのような内容の文になると日本語教育は、言うまでもなく、もう単なる言語の教授だけではすまされない。日本語教師は、日本語の教授法に熟達していると同時に、日本語を支えている自然的、社会的、歴史的、文化的背景の十分な理解者でなければならない、しかも、それだけではなく、学習者の母国語である英語とその背景にある同様の知識、理解もひとしく求められる。⁹⁾それは立場こそ違え、日本における英語教師と、英語を母国語とする国における日本語教師が共通に持っている課題の一つであるといえるであろう。このアメリカの、一大学での日本語クラスで、私が終始考えさせられていたことも、一つの国の、或いは一つの民族の言語をいかにして教えるかという重要問題に深くかかわっている語学教師の責任というようなことであった。

Ⅵ. 日本語教育の若干の問題点

a. 日本語教師と教授法

日本語教育でもやはり一番問題になるのは教師の力量と熱意であろう。日本人に英語を教えるのもむづかしいが、アメリカ人に日本語を教えるのはそれ以上にむづかしい、というのが Mrs. McClain の日本語クラスを聴講して受けた私の強い印象である。これは、日本における英語教育などと比べて、外国語としての日本語教育の歴史が浅く、日本語教授法の研究もはるかに遅れていることと、無関係ではない。実際、海外で日本語を教えている日本人教師の多くは、私がその後東南アジア各国の大学を訪門して見学した例などによっても、個人的な経験と勘だけに頼りながら、自己流の教授法で切りまわしていることが多いように見受けられる。¹⁰⁾アメリカにおける日本語教育の場合にも、多かれ少なかれ、このような傾向は認められるであろう。しかし、日本語と英語の知識と運用力がいかに十分なものではあっても、それだけで教壇に立つとすれば、ほ

(9) 武本昌三「英語教育改善のための基本問題—誰が、何を、何故教えるのか—」『人文研究』第50輯参照。

(10) 例えば韓国の大学における日本語教育でも、教師と教授法について問題があり、根本的な改善が求められている。村崎恭子「韓国における日本語学習」『言語』大修館、1977年9月号参照。

とんど絶望的で、学生達の頭にはただ混乱と、devil's language のイメージしか残さない結果に終わってしまうかも知れない。

この Univ. of Oregon の日本語クラスを、混乱と絶望から救っていたのは、明らかに Mrs. McClain の熱意と優秀な教授技能であった。これは、日本で大学を終え、その後の二十数年をアメリカで過しながら研究と教育に従事し、日本語教授に関する数々の著作を発表してきた彼女ならではのことで、誰でも真似が出来るというものではないであろう。ともあれ、重要なことは、日本語教授法の理論を身につけた優秀な教師の存在と適切な教材の選択であって、日本語教育では、日本の英語教育以上に、このことが学習効果を左右する決定的な要素になると思われる。

b. 国情理解のアンバランス

英語教育の中で、日本人学生に英米文化を教えていくことは、さほど困難であるとは言えないが、日本語教育の中で、アメリカ人学生に日本文化を教えていくことは、そう易しいことではない。よく言われるように、日米間の相手国に対する情報量と国情理解の程度は圧倒的にアンバランスであり、日本人は、アメリカ及びアメリカ人のことを多く知り、また知ろうとする意欲が強いのに対して、普通、アメリカ人の日本及び日本人に対する態度は全くその逆だからである。

もちろんアメリカ人の中でも、大学生でしかも日本語を学ぼうとする学生達は例外と考えるべきであろう。それでも、例えばこの Univ. of Oregon の日本語クラスで、東京が世界一、二の大都会であることを知らぬ者は少なくはなかった。テキストの第二課には「その江戸も明治になってから年々人口が多くなり、今では人口一千万の大きな町になってしまいました」とあって、「一千万」とは “ten millions” のことだと聞かされると、クラスの中には、ちょっとしたよめきがあったくらいである。第五課で大学の話が出た時には、日本には大学がいくつあるか、という質問があり、Mrs. McClain もわからず私に助けを求めた。私が、「こまかい数字は覚えていないが、アメリカに次いで多

く、短大も含めれば1,000 くらいと思う」と答えた時の反応も同様であった。

私がこの大学の学生であった20年前とは様変りで、TOYOTA や MAZDA が至るところに進出し、HONDA が走りまわっている、それらが日本製であることを知らない者もいる。日本製のテレビを見、日本製の食器を用い、日本製のシャツを着ていても、日本は、一般のアメリカ人にとっては依然として遠いどこかアジアの exotic な小国であって、要するにほとんど何も知らないのが通例である。クラスの free talking の時に、日本語で時計のことを何というか、と聞かれたある学生が“Seiko”と答えたのが、私にはこっけいというよりも、“Seiko”と日本が結びついていることでちょっと驚ろいたくらいである。

アメリカの学生達はこのように、日本語のみならず、日本や日本人についても、ほとんど白紙の状態からスタートする。それだけに、彼等がやがて、日本語の中に自分達には納得出来ない風変りな何ものかを感じはじめ、それが自分達のものとは全く質を異にした日本文化であることに気がついていく時の驚ろきと関心は大きい。アメリカにおける日本語教育は、日米間の国情理解の極端なアンバランスの上で、語学教育のみならず文化教育の面でも、特に慎重な配慮が必要であることを認識しなければならないであろう。

c. 自然環境の相違

自然環境の相違が、日本語を教える場合に、意外な trouble spot になることが珍らしくはない。アメリカは日本の25倍もあって広大であるから一概には言えないが、アメリカのほぼ中央を南北に、いわゆる 20-inch rainfall line が走っていて、この線から西側は太平洋岸諸州を含めて夏は雨が殆んど降らず、雨期は冬である。そして雨量は北へ上るほど多い。和辻哲郎の「風土」の分類に従えば、ヨーロッパの牧場型に類似しているといえる。Oregon は特に、夏の乾燥と冬の湿潤がおだやかに入れ替り、まわりめぐっているという点で、とりわけヨーロッパ的であった。自然環境もそのために、どことなく日本とは違う。

日本語クラスの第二週目に、「このはなはさくらですか」という文が出てい

るが、学生達は、さくら=cherry blossoms と教えられ、すぐにその意味を理解している。桜は Univ. of Oregon の campus にも、大学の周辺の通りにも沢山あって、春になると一斉に咲きほころび、学生達にもなじみなのである。ただ違うのは、日本の桜のように短命ではなく、時には一ヶ月以上も美しい満開が続くということであった。したがって、桜前線とか三分咲きとか、花吹雪とか、一刻を惜しむような桜情報に季節の流れを感じたり、散る花を愛惜する日本人の情感は彼等には理解しにくい。桜は古来、日本の国花であって、その散り際のいさぎよさがかつては武士道の鑑であり、戦時中は特攻隊の精神でもあったように、日本人の精神生活に重要な位置を占め、しばしば詩歌、文学の主題でもあったのである。それだけに、さくら=cherry blossoms だけでは桜そのものだけではなく桜が象徴する日本語の含意がよく理解出来ない。いさぎよく死ぬ、という意味での「桜のように散る」は、ぐずぐずと何時までも死なない、と受取られかねないし、「明日ありと思う心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」のような delicate な歌の意味も何となく掴めず要領を得ないことになってしまう。このような問題は、程度の差こそあれ、その他のいろいろな花や木、野菜、果物類から動物などについてさえも、ひとしく起り得ることと思われる。

太平洋岸諸州では、夏にはほとんど雨が降らないから雑草は育ちにくい。したがって、町の中の空地のみならず野原や山や川に至るまで、下草の生い繁った日本とはどこかイメージが違う。それに夏の乾燥は虫の生育をも阻むのであろうか、秋になっても虫の合唱はどこからも聞こえてこない。「八月の十日前だが虫が鳴いている」という簡単な表現でも、だから、アメリカ人学生には大変わかりにくく、教えるのに苦労するという問題が起ったりもする。¹¹⁾ 八月の十日前だが、という季節感も、虫が鳴くということの実態も、彼等には身近かな経験としては感じとることが出来ないからである。

(11) この例は、池田摩耶子『日本語再発見』三省堂、1977年、pp. 1-11 から借用した。Univ. of Oregon で使っているものと同じ前述のテキスト「日本現代文読本」にある、川端康成「山の音」の一節である。

d. 家の概念と人間関係の相違

先に示したテキストの第一課の「会話」の続きには、次のようなやりとりの場面がある。

C. 目上と目下は自分よりも上か下かをかんがえるわけですね。でも、自分よりも上にも下にも入らない人があるでしょう。

B. あります。自分と同じくらいの人には「さん」をつけたり「君」をつけたりします。いつ「さん」をつかうか、いつ「君」をつかうかはむずかしくて一口には言えません。私はいつも「さん」をつけることにしています。

このような文がテキストのあちらこちらに出てくると、日本人の人間関係についてもどこかできちんとふれておかなければならない。日本人の人間関係というのは、基本的に、英米人とは異なっていて彼等には理解しにくい事柄だからである。

日本人の人間関係は、島国としての日本の特性が基底になってはいるが、日本の家屋構造や家族関係と、その延長と考えられる村などの共同体の性格を抜きにしては考えられない。アメリカの家は、部屋毎の鍵が象徴するように個室内では完全なプライバシーが保たれ、家族がつき合うのは居間や食堂などにおいてである。そこでは社会生活の規則が入り込んでいて、親子といえども、個人対個人の、相互に人格を認め合った人間関係が維持される。これに対して日本の家は、元来、障子や襖で仕切られ、プライバシーは保ちにくい。一旦玄関の敷居をまたいで靴を脱ぐと、そこは家族全体が一つに融け込んだ、水入らずの無礼講の世界がひろがることになる。だから先づ、家といっても日本の家は、構造的にも内容的にも全くアメリカの家とは異なることを理解させておく必要がある。

水入らずの無礼講の家族集団であれば、お互い同志の会話でもいわゆる以心伝心であって顕現的である必要はない。冗語性は極端に低く押えられ、代りに状況依存度が大きくなってくる。喜怒哀楽の感情も、言葉ではあまりあらわさず、「沈黙は金」であって、アメリカ人流の自己顕示型の饒舌は、はしたないと軽蔑されてしまう。日本語というのは結局、このような家族的な会話のあり方が社会全体にひろめられたようなものと考えてよいであろう。

一方、家族意識は村人意識につながり、互いに強い連帯感で結ばれてはいるが、その反面、外部との接触には臆病になり排他的にならざるを得ない。家族的な集団の中で、家長などの勢力の下に団結し、長上に従順に従うことには慣れているが、個人として自主的に行動することは不得手である。英語にはない、忠孝、義理人情、甘え¹²⁾などの感情はこのような背景の下に育まれてきた。タテ社会の人間関係を象徴する、先輩、後輩、目上、目下、長幼男女の別なども、言葉の意味だけでは本当に理解させることは出来ない。ここでも日本語教師には、英語とは異なった日本語のひろい背景的知識が要求されることになるのである。

お わ り に

日本語はあいまいで情緒的な表現が多く論理的ではない、とはよく言われることである。印欧系の言語を基準にして考えるとそういうことになるのかも知れないが、実は日本語には日本語としての論理があるのであって、むしろ英語などよりも論理的な一面をさえ持っているといえないこともない。この日本語に内在する論理を適確に整理し分類して、定理公式にまとめ上げていくという作業は、たしかに、歴史の浅い外国語としての日本語教育が当面している大きな研究課題であろう。¹³⁾

本稿では、しかし、この問題には直接触れる余裕はなかった。はじめにも述べたように、本稿で示そうとしたのはアメリカの大学における一年目日本語クラスの授業進捗度であり、時間的経過による学習到達度である。そのために、テキストの本文や試験問題なども紙数を気にしながら敢えて掲げた。アメリカの日本語教育が日本の英語教育の参考になり得るとしても、このような形で日

(12) この「甘え」は日本人の持つ独特の感情で、義理、人情と密接な関係があり、日本人の精神構造を理解するための重要な概念となるばかりでなく、日本の社会構造を理解するための重要な概念ともなる、という。土居健郎『甘えの構造』弘文堂、1977、p. 23。

(13) この趣旨に沿った提言としては、最近のものに、倉谷直臣「日本語の論理性」朝日新聞、1977年9月3日、がある。

本語クラスの実情を伝えたものは、私の知る限りでは、今までなかったと思うからにはほかならない。

一般的に、アメリカ人学生というのは、日本人学生に比べても、外国語が得意でもなければ外国語学習に特に熱心であるとも言えないであろう。それだけにアメリカの外国語教育では、日本に比べて、このような短期間に効果を上げている、と速断することは易しいが、そのための資料を提供することが本稿の趣旨なのではない。日本とアメリカでは、外国語学習の必要性や目的も決して同じではないし、学習環境や制度上の大きな相違もあって、単純な比較はむづかしいに違いない。しかし、それにもかかわらず、このようなアメリカの日本語教育を見ていながら、改めて強く感じさせられていたのは、中学入学以来、8年も10年も時間をかけている、いかにも非能率的な日本の英語教育——それには、私自身も、教師の一人として深く拘わってきたわけであるが——のあり方であったことを思い出さざるを得ないのである。

最後に、日本語教育の問題点と考えられる若干のものをあげてみたが、これらは立場こそ違え、日本の英語教育にもそのままあてはまる問題でもある。これらのほかにも問題点は数多くある筈なので、日本の英語教育改善のための問題点とともにこれからも引続き、検討を加えていくことにしたい。

〔附記〕 この稿を終えるにあたり、1974年度の Univ. of Oregon, 日本語クラスで聴講することを快よく許してくれた Mrs. McClain に改めてお礼を申し上げたい。彼女を補佐して日本語クラスの運営にあたった T. A. の人達にも資料の収集などの点でいろいろお世話になった。記して感謝の意を表する。